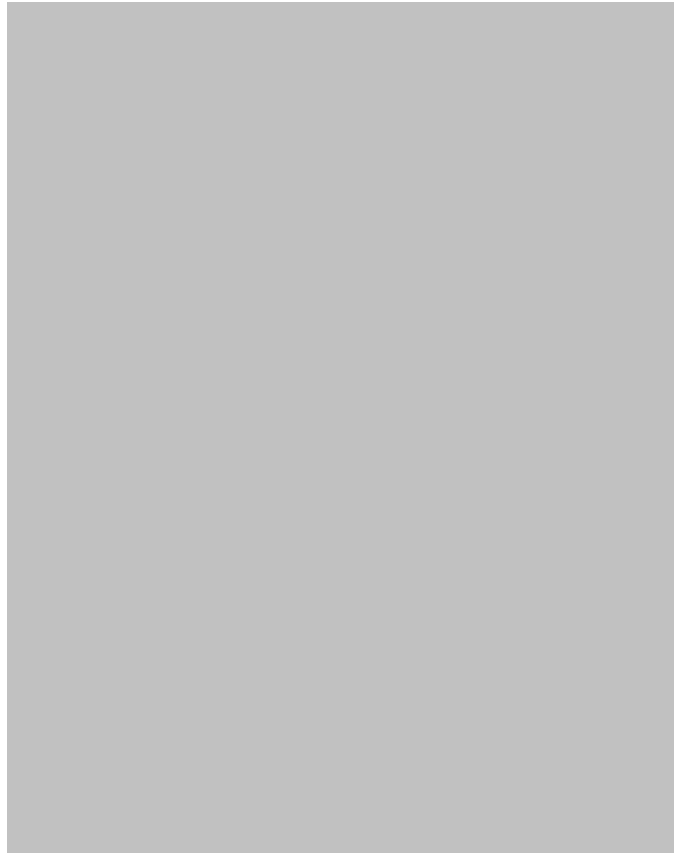


川口淳 《ゾエア》



環

は動感をもたらす形態です。円弧の軌道をめぐるエネルギーは果てしなく、均衡状態がちよつとズレれば、拡散するか反対に心に向って消失するか、そんな危うさを秘めながらも満ち足りた風情を呈します。《ゾエア》の円環はそういう意味ではまさにズレまくり、一様ならぬ配列で、しかしびつたり二十七枚のパーツで構成されました。躍動と安定の相反する感覚が迫り、盛りに盛ったオーナメントが揺らぐ気持ち煽るようです。

さて本作はやきものです。やきもの多くは器物を目的として作られますが、高温で焼いても土を原料とする肌は水や汚れが染みやすく、表面に釉薬というガラス質の層を形成する例がほとんどです。おそらく今皆さんがお使いの器も、手や口に触れているのはこの部分。釉薬は機能だけでなく鑑賞性においても重要で、施釉しない焼締めでも窯の中でふりかかった灰による自然釉を景色として賞でる歴史がわが国にはあります。その潤んだ艶が視点を定まらせずに、表層から深奥までユラユラと動かすうちに感情移入の作用を生じさせるからです。

対して《ゾエア》は酸化コバルトを呈色剤とした濃藍が遠くへと誘いはするものの、眼差しを深めようにも反射が強く、硬質なフラット感に感傷を阻まれてしま

ます。そして丸や三角、渦巻き、その他もろもろの形状のオーナメントは、文様の範疇から字義通り飛び出し、金銀彩の輝きに乗ってエネルギーを放出します。取り澄ました文様の内部でくすぶっていた、装飾という人間の根源的な意欲を解放する。そんな企みと、パラレルに、伝統的やきもの製造、すなわち分業のシステムによる造形思考の成立に個人で挑む作者は、あらかじめ作り置いたオーナメントを付加する方法論を「トッピング」といとも軽やかに呼んでいます。

ところで「ゾエア」とは、一般にカニやエビなどの甲殻類の幼生のことを指します。幾度となく変態を繰り返しても、ゾエア幼生は間違いなく成体のかたちへと辿りつく。それは細胞の一つ一つに情報が記憶されているからにほかなりません。本作の寄贈者はプロフェッショナルとしても個人としても尊敬していたギャラリーのオーナーでした。残念なことに手続きを終えてまもなくにその方は他界され、今なお私は寂しくてたまりません。しかし紺青の深さ、圧倒する輝き、目移りさせるかたちの刺激……そうした事柄のすべてに制作者、そして本作に関わった人の思いが記録され、展覧会場で多数の鑑賞者に届けられることでしょう。美術館の機能を改めて考えさせられた一点です。

(工芸課主任研究員 今井陽子)

川口淳(1951-)
《ゾエア》

1991年
磁器、色絵
高さ114、幅104、奥行3cm
平成27年度寄贈
撮影：斎城卓